

2009年3月7日

方広寺跡現地説明会資料

主催 京都国立博物館・(財)京都市埋蔵文化財研究所

所在地 京都市東山区茶屋町 京都国立博物館敷地内

調査期間 2008年12月8日～2009年3月31日(予定)

調査面積 約910㎡

調査機関 (財)京都市埋蔵文化財研究所 (<http://www.kyoto-arc.or.jp/>)

はじめに

今回の調査は京都国立博物館の平常展示館建替えに伴って実施した調査です。京都国立博物館の敷地内は、平安時代後期には後白河法皇の御在所であった法住寺殿、中世には六波羅政庁の跡地に推定されており、洛東でも歴史の深い場所です。とくに、敷地北側は豊臣秀吉が京都に造営した方広寺大仏殿の南回廊推定地に相当し、過去の調査において南面石塁や南門・回廊跡を発見しています。今回の調査は南門北側の基壇の状況や回廊の東への延長部分を明らかにするとともに、南面石塁の造成工事の痕跡を確認するため調査を実施しました。

発掘調査であきらかになったこと

まず、平成10年に発見した南門の北側において、東西方向の浅い地業痕跡を確認しました。幅約1.5mで、再発掘した南門北側柱の根石から約1.5m離れています。地業周囲には帯状に花崗岩が分布しており、南門北端の雨落溝の石を据えた布掘り地業の痕跡ではないかと考えています。

南回廊は以前の調査で複廊であったことが判明していますが、今回新たに4間分の礎石根石群を発見し、南門から東へ9間分回廊の遺構が残っていることがわかりました。柱間は以前の調査所見と同様に、3.75m(12.5尺)で割り付けられています。そして、回廊内では秀吉が大仏殿の造営にあたって行った土地造成の痕跡を確認しました。調査区東端では地盤層になっていますが、西にいくに従い小さな谷地形などを丁寧に埋めて平場を作っていきます。谷を埋めるにあたっては、あらかじめ水切りの溝を掘って湧き水の処理を行い、南門の東から南へ排水したようです。

南門の位置では約0.7mの盛り土を行っており、さらに西の石塁では盛り土のうえに礫で強固な裏込め地業を行ってました。裏込めの中には、石仏や五輪塔などの石造物が多数含まれています。

造成地業全体としては、地盤層と盛土の変換点を確認したことによって、大仏殿を建立するのに東側1/3は斜面をカットし、西側は盛り土を行って平場を造成したことが判明しました。ちなみに西側の石塁は高さ約3mあり、単純に計算すると大仏殿の平場全体を造成す

るのに、約55,000立米の盛土を行ったこととなります。これは現在の10tダンプ1万台分に相当し、「天下人」である秀吉の権力の大きさを物語っています。

まとめ

方広寺は秀吉が関白となり豊臣姓を賜った翌年、天正14年(1586)に造営が始まりました。その造営は聚楽第とともに「天下人」秀吉の権力を誇示することを目的としたものであり、5カ年で東大寺大仏殿よりも大きな仏殿と大仏を建立するというものでした。天正16年5月には「京ニハ大仏建立トテ、石壇ヲツミ土ヲ上テ、其上ニテ洛中上下ノ衆ニ餅酒下行シテヲトラセラルル」(『多聞院日記』)として造成事業が行われた様子が窺えます。今回確認した石塁などの地業は大半がこの時のものと思われます。

その後、慶長元年(1596)の大地震によって方広寺の大仏と築地は大破し、権威のモニュメントの完成をみることなく秀吉は亡くなります。方広寺の再建は秀頼が受け継ぎ、この時に大仏殿とともに築地が回廊に建て替えられたようです。洛中洛外図などには回廊は単廊として描かれているのに、調査で確認した回廊は複廊であり、格式が高かったことを窺わせませす。しかし、慶長7年(1602)またしても大仏鑄造中に火災にあい、方広寺は焼け落ちてしまいます。

そして、慶長13年(1608)には、秀頼による二度目の再建が企画されます。豊臣氏の財力を浪費させる徳川家康の策略でもあり、「国家安康」「君臣豊楽」の梵鐘銘が問題となり、豊臣氏の滅亡に繋がる逸話はあまりにも有名です。方広寺の歴史はまさに豊臣氏落日の歴史でもあったのです。



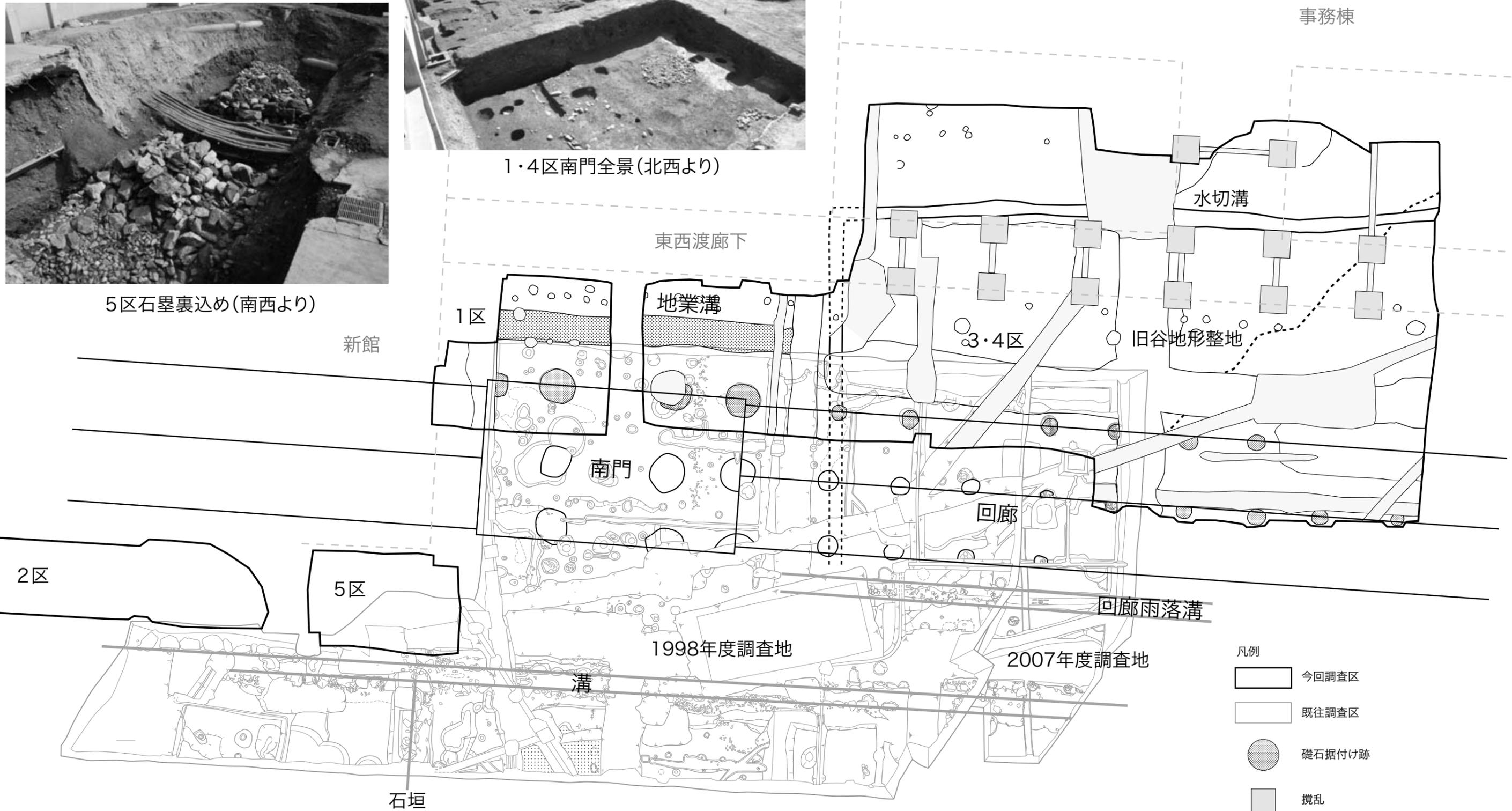
回廊跡全景(東より)



5区石墨裏込め(南西より)



1・4区南門全景(北西より)

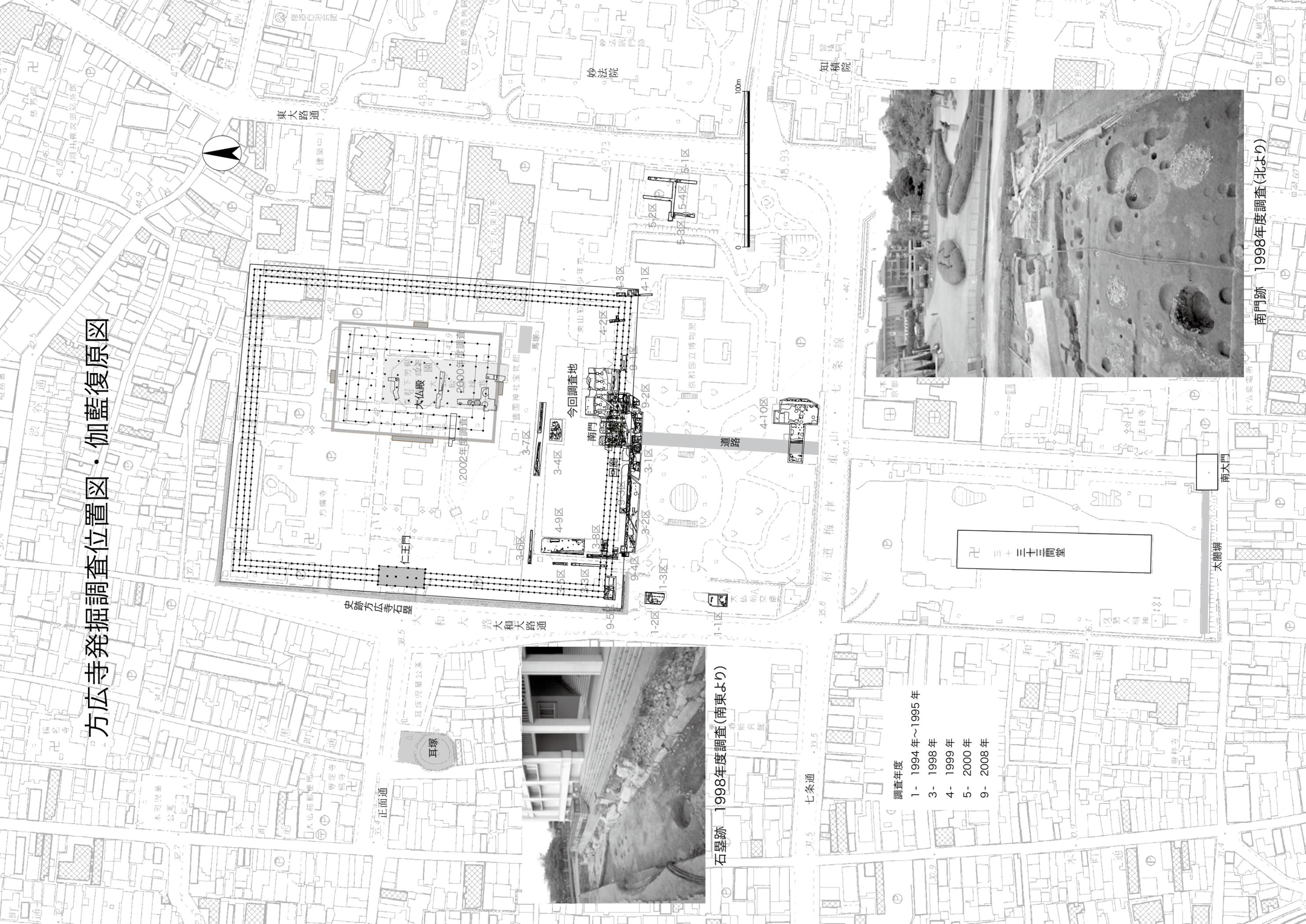


- 凡例
- 今回調査区
 - 既往調査区
 - 礎石据付け跡
 - 攪乱

0 10m

方広寺南門・回廊調査平面図

方広寺発掘調査位置図・伽藍復原図



- 調査年度
- 1- 1994年～1995年
 - 3- 1998年
 - 4- 1999年
 - 5- 2000年
 - 9- 2008年